



軽井沢の家の庭に咲くふしくろせんとうと共に(昭和48年)



軽井沢千ヶ滝の家

## ゆうすげの花

わたしたち恩賜賞三人のテーブルには向き合って両陛下、横には犬丸直芸術院長と奥田第一部長が一緒にいる。皆揃うと、陛下がすぐ「さっきの記念撮影は暑かったでしょう、お苦しかったでしょう」とおっしゃった。お心持のこともたお言葉だったので、わたしは心にしみた。陛下はお優しい方なのだ、と思った。両陛下は他の四つのテーブルにもお廻りになられる筈だと知っていたので、自然な機会に、わたしは皇后さまに申しあげた。「もうずいぶん昔になりましたけれど、わたくし軽井沢で皇后さまとバスをご一緒したことがございます。秋篠の宮様が三才か四才くらいのころ、鯛の里廻りスケートセンター行のバスに乗りますと、皇后さまと秋篠の宮さまがお乗りになってらして……」すると皇后さまがお眼を瞳るようになさって、「まあ、あのバスに。わたくし軽井沢でバスに乗ったの、あの時一回きりなんですよ、どうしても一回乗ってみたいくて。まあ、あのバスにあなたも乗ってらしたんですか、それはまあ、失礼いたしました」とおっしゃったのでわたしはもうどきまぎしてしまっただけ。たった一回きりの皇后さまのバスにめったにバスに乗らないわたしが乗り合わせたとは思議であった。話が弾んで軽井沢の野の花々の年々少なくなるのを嘆いたりした。皇后さまがお話になった。「ゆうすげの花が大好きでございましてね、いつも申しおりましたら陛下がここで栽培して下さいましてね、花が咲くようになりましたの、花が咲きましたら観にいらして下さいね」とおっしゃった。思いもかけない親しいお言葉に、わたしはとっさにお返事が出来なかった。「お花少なくなりましたですけどほらあの赤い花はよく咲いてますね」とふしくろせんとうのことを話され、わたしも「あの花と姥百合だけはいくらでも増えてわたくしの庭にも咲いております」すると皇后さまは美しく伸ばした人さし指を両手を合わせて「ああ、姥百合合ってこうびゅつとね」と右手の人さし指をさっと放しておっしゃった。姥百合の花がまるでそこに咲いているような見事な表現力で、わたしはあっと思った。やっぱり詩をお作りになったり、訳したりなさるお心の豊かな方だ、と感じ入ったのであった。